

「戦争」は
前線だけじゃない。



コードギアス

CODE GEASS
Akito the Exiled

亡国のアキト

幕間「アキトを待ちながら」

小太刀右京

原作：サンライズ イラスト：U.G.E

降り続いてきた雷雨は、いつの間にか止んでいた。
ラジオから聞こえていたノルディック・メタルは退屈なニュースに切り替わって、気だるげで煮え切らない太陽と入り交じる。
「今日も動きはなし、か」
ソフィ・ランドル博士は退屈な書類仕事の手を止めて、少し伸びをした。
ヴァイスボルフ城の一角に与えられた彼女

の研究室は、大学時代よりもよほど広くて快適で、そこにはいささかの文句もない。
因果だな、と思うのは、今手がけている研究が無意味になるかもしれない、という事実
に、人命の喪失とは別の恐れを抱いている自分のことだ。
脳科学分野からのナイトメアフレーム統合制御分野へのアプローチ。その特異なコンセプトに基づいて、ユーロピア有数の軍需コン
グロマリットであるクレマン財閥に招聘され
て、どれくらい経つだろうか。
KMFを独立した戦闘単位ではなく、中隊規模の群体生命、特に蟻や蜂のような昆虫に見立ててより有機的な戦闘を行なわしめる、
という発想は、不世出の天才戦術家にして彼女たちの指揮官、レイラ・マルカルの独創によるものである。
『脳は、かつてルネ・デカルトが妄想したような独立した人間機械の中枢ではない。それは意識の中枢結節点ではあるが、意識そのものの総体ではない』
ソフィは手元の古びたレポートを取り上げて、懐かしそうに見た。まだ研究費のケタがいくつかなかった頃、自分が各所に提出したものだ。クレマン財閥の目に止まったのは、
本当に運がよかった。ユーロピアの旧態依然とした国防体制に甘んじておらず、自社独自のKMF開発を試みていた同財閥は、ソフィの研究に目をつけたのだ。
『我々の意識は、神経系統はもちろん、内臓

や感覚器、ひいては周囲の空間に対する記憶に立脚した驚くほど複合的なものである。自我、あるいはそれと我々が信じているものは、周囲の人々が話す言葉、周囲の文化、食生活、風景、そうしたものと不可分である。投獄された人間の人格が変化するのはただ心理的外傷によるものだけではない。環境と切り離されることによって意識そのものが変容するからである。文化的侵略、分けても国家の喪失によるそれが数世紀間に渡る民族的記憶として止め置かれるのはまさにこれを原因としており――』
今から思えば、なんとも青臭い文章だ。複数の脳をネットワーク化することによってさらに大きなシナプスネットワークを構築することで複合知性を開発する、そんな夢に燃えていた頃の。
追憶を断ち切ったのは、濃く入れたカフェ・オレの香りだった。
「ランドル博士、どうぞ」
「ありがとう」
少し不安そうな研修医、ケイト・ノヴァックのあどけない横顔。
まだ学生といてもいい年齢の彼女を、専門医研修という名目でスタッフとして引っ張り込んだのはひとえに人手が足りないからだ。優秀な人間を研究室に引き入れるのはは砂浜で針を探すより難しい。先駆者のいない、トングデモと見なされがちな分野ではなおさらだ。部下である彼女とフェリッパ・バルトロウの

ナルヴァ。
エストニアの真珠と呼ばれるこの都市は、周囲のほとんどを森林と沼地で覆われ、大規模な舞台展開を行うことが極めて困難である。サンクトペテルブルクより撤退するE.U.軍132連隊は、ナルヴァ河沿いの街道に拘束され、優勢なユーロ・ブリタニア軍によって包囲殲滅されようとしていた。
だが、包囲軍の一角、聖ラファエル騎士団眼前に忽然と出現したユーロピアの新型KMF部隊「wZERO」の猛攻によって騎士団は壊滅。132連隊は撤退に成功した。
しかしただひとり敵中に奇襲をかけた「wZERO」唯一の生き残りである日向アキト少尉が、彼の基地であるドイツ・ヴァイスボルフ城に戻るには、まだ少しの時間が必要だった。
これは、その時期に行なわれた、短い幕間の物語である。
*

の研究室は、大学時代よりもよほど広くて快適で、そこにはいささかの文句もない。
因果だな、と思うのは、今手がけている研究が無意味になるかもしれない、という事実
に、人命の喪失とは別の恐れを抱いている自分のことだ。
脳科学分野からのナイトメアフレーム統合制御分野へのアプローチ。その特異なコンセプトに基づいて、ユーロピア有数の軍需コン
グロマリットであるクレマン財閥に招聘され
て、どれくらい経つだろうか。
KMFを独立した戦闘単位ではなく、中隊規模の群体生命、特に蟻や蜂のような昆虫に見立ててより有機的な戦闘を行なわしめる、
という発想は、不世出の天才戦術家にして彼女たちの指揮官、レイラ・マルカルの独創によるものである。
『脳は、かつてルネ・デカルトが妄想したような独立した人間機械の中枢ではない。それは意識の中枢結節点ではあるが、意識そのものの総体ではない』
ソフィは手元の古びたレポートを取り上げて、懐かしそうに見た。まだ研究費のケタがいくつかなかった頃、自分が各所に提出したものだ。クレマン財閥の目に止まったのは、
本当に運がよかった。ユーロピアの旧態依然とした国防体制に甘んじておらず、自社独自のKMF開発を試みていた同財閥は、ソフィの研究に目をつけたのだ。
『我々の意識は、神経系統はもちろん、内臓

や感覚器、ひいては周囲の空間に対する記憶に立脚した驚くほど複合的なものである。自我、あるいはそれと我々が信じているものは、周囲の人々が話す言葉、周囲の文化、食生活、風景、そうしたものと不可分である。投獄された人間の人格が変化するのはただ心理的外傷によるものだけではない。環境と切り離されることによって意識そのものが変容するからである。文化的侵略、分けても国家の喪失によるそれが数世紀間に渡る民族的記憶として止め置かれるのはまさにこれを原因としており――』
今から思えば、なんとも青臭い文章だ。複数の脳をネットワーク化することによってさらに大きなシナプスネットワークを構築することで複合知性を開発する、そんな夢に燃えていた頃の。
追憶を断ち切ったのは、濃く入れたカフェ・オレの香りだった。
「ランドル博士、どうぞ」
「ありがとう」
少し不安そうな研修医、ケイト・ノヴァックのあどけない横顔。
まだ学生といてもいい年齢の彼女を、専門医研修という名目でスタッフとして引っ張り込んだのはひとえに人手が足りないからだ。優秀な人間を研究室に引き入れるのはは砂浜で針を探すより難しい。先駆者のいない、トングデモと見なされがちな分野ではなおさらだ。部下である彼女とフェリッパ・バルトロウの

wZERO部隊

E.U.軍が編成した特殊部隊。日本人の少年少女がKMFパイロットなどの実働部隊を担当。作戦立案、通信といった後方支援をE.U.人が担当する。日本人は正規軍の被害に計上されないため、生還率の低い任務に従事させられる事が多い。

日向アキト

wZERO隊に所属するKMFパイロット。乗機はアレクサンダ。普段は穏やかで物静かな少年だが、戦いの最中に歓喜の笑みを浮かべるなどの二面性を持ち、謎めいた言動や振る舞いを見せる。

アンナ・クレマン

アレクサンダを開発した天才科学者。レイラの友人。

レイラ・マルカル

元ブリタニア貴族の少女でwZERO隊の参謀。主に作戦立案を担当し、アキトたち隊員の命を軽視する上層部に憤りを感じている。

フェリッパ・バルトロウ

ソフィの部下。民間からの協力者。

ケイト・ノヴァック

ソフィの部下で研修医。

ヒルダ・フェイガン

アンナの助手。

サラ・デインズ

wZERO部隊のオペレーター。

ソフィ・ランドル

脳科学の権威で、民間からの協力者。

オスカー・ハメル

ヴァイスボルフ城の警備部隊隊長。

クラウド・ウォリック

wZERO部隊の副官

オリビア・ロウエル

wZERO部隊のオペレーター。

クロエ・ウインケル

アンナの助手。

ジョウ・ワイズ

ソフィの助手を務める研究員。

ジーン・スマイラス

ユーロピア共和国連合の将軍。

「……日向少尉、まだ戻れないそうです」
「そう、残念ね」

ふたりは、ソフィに取ってかけがえのない財産だった。

「ジョウはどうしたの？」

いつもなら隣りのデスクで菓子を買っている太り気味の助手が見当たらないことにより、やき気がついて、ソフィは首を巡らせた。どうやら、それなりに集中できていた、というところらしい。

「ああ、ジョウなら」

苦笑して、ケイトは窓の外を指さした。

「なるほどね」

中庭、大量のチョコレート菓子を抱えたジョウ・ワイズが、小鳥たちに群がられている。じゃれつかれている、というよりはほとんど襲撃されている、という有様だ。

「下の町のチョコレートショップが閉店するとかで、買いために外かけてたんです。原料のカカオが、アフリカ情勢のせいで値上がりしたとかで。私も後でちよっと分けてもらうことになってます」

「あら、私の分もお願いね」

「はい」

高度な脳活動はそれに比例して糖分を必要とする。ジョウ・ワイズが甘味漬けになっているのは決して単に自己管理が出来ていない、という問題ではない。まあ、運動不足なのは事実なので、少しは歩兵部隊のトレーニングにでも混ぜてみたらどうか、とは思いますが、恋愛対象に含めているわけでもないから個人の自由であろう、とは思う。

「……日向少尉、まだ戻れないそうです」

「そう、残念ね」

日向アキト。

ただひとりナルヴァ救出作戦から生還した「アレクサンダ」のパイロット。

彼が帰投しなかったことを残念だ、と思うのは、何よりも彼の脳波が明らかに異常な数値を示していたからだ。

（……厳密には、正常すぎた、というべきでしょうけれど）

アレクサンダの特異な操縦システムと、ストレスを緩和するため大量に投入された化学物質。それらがもたらすはずの狂乱状態の中で、ただひとり正常な脳波を保ったまま戦闘を継続した日向アキトという少年は、そここそ砂粒の中のダイヤモンドのように貴重だった。

すぐにでも基地に帰投させ、その脳を取り出してみたい、という衝動に駆られるが、あいに人道にも書類上もそのようには行かない。

（さて、どうするかしらね、あのお嬢様は）

半年前から10パーセント値上がりしたカフェ・オレは、どうも少し香りが薄いような気がした。

*

「えー、起きて、起きて、レイラ」

「うひゃあっ!」

耳の後ろをくすぐられる感触がして、レイ

ラ・マルカルはまどろみの泥濘から引き上げられた。

「な、なんなんですか、アンナ」

「うふふ〜」

なにやら長細いビニールで出来た管を手にして、彼女の旧友、アンナ・クレマンが笑っていた。

一見するとあどけないお嬢様にしか見えないう彼女が、れつきとした技術大尉であり、KM F「アレクサンダ」の開発責任者である。軍事企業クレマン・ファクトリーの令嬢にして、幼いころに「グラスゴー」型KM Fを分解したという天才児だ。

「私が考案した新型の捕虫管で、耳元をふつ、てしたの。空気の通し方に工夫があるのよ」

「そ、そう」

アンナの趣味は昆虫学である。趣味といっても玄人はだして、研究室で博士号を取るよりに強く誘われているほどのものだ。特に生態に強く、アレクサンダの独特の機動プログラムには、アンナの研究が反映されている。

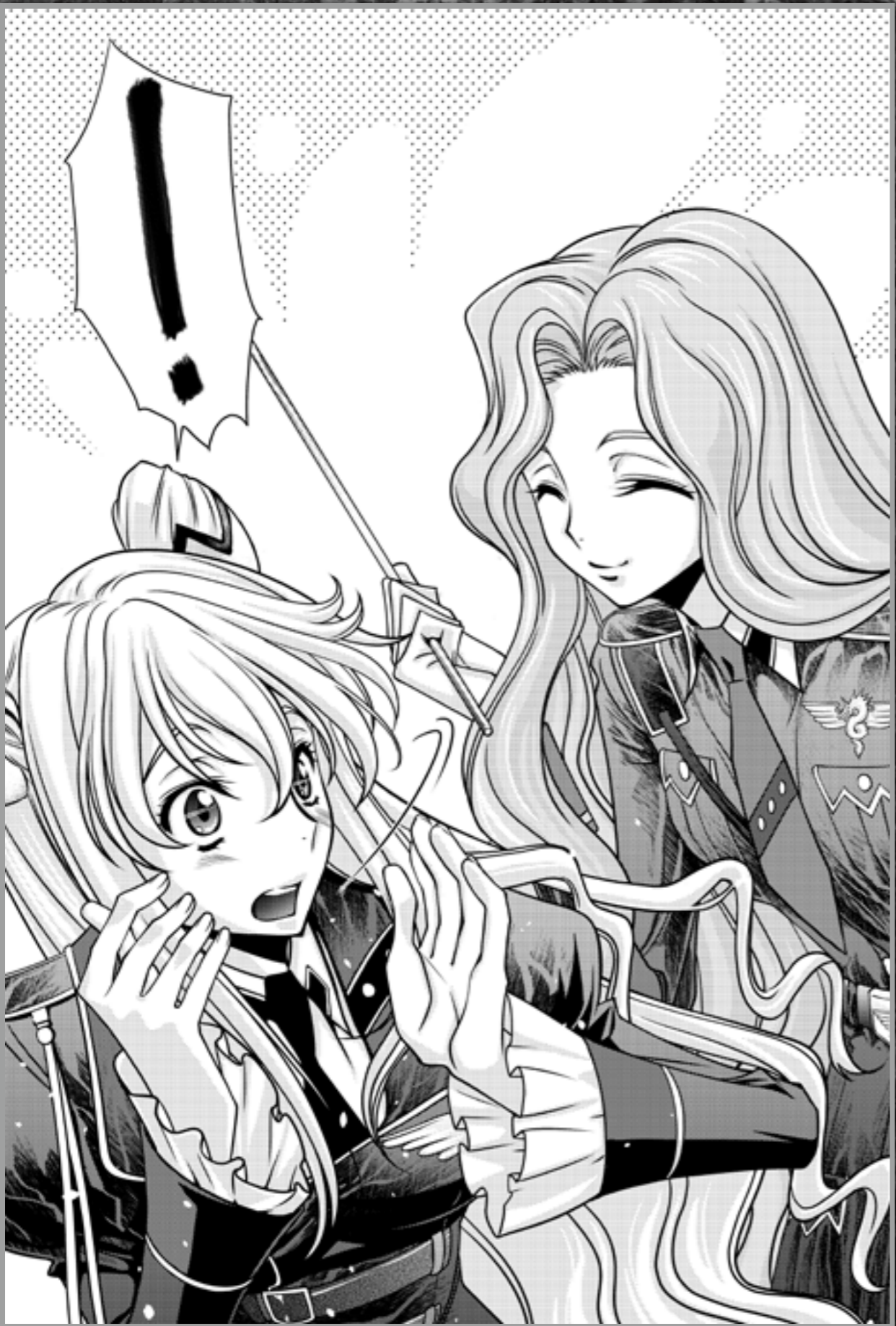
「それより、居眠りなんて珍しいわね」

そう言われてようやく、レイラは執務室の机に突っ伏して寝ていたことに気がついた。よだれの後を、慌ててハンカチでぬぐう。

「……日向少尉の処遇がまだ決まらないんです」

「あら」

「ナルヴァ戦の後、撤退する132連隊のラックに便乗してリガ市の後方根拠地にアレク



「腹が、減ったな」
日向アキトが考えていたことは、
この時、それに尽きた。

サンダとともに送られたまではよかったんですが」

レイラは大きくため息をついた。

「その後、WZERO〃部隊に帰還するための足をどこの部隊も出し渋っているんです」

「あれだけの部隊が撤退するんですものね」

飛行機も、車も足りないが」

「足りないならまだいいんですが」

金髪の司令官は不機嫌だった。

「言うに事欠いて、損耗したKMFの補充としてアレクサンダをよこせ、日向少尉をこのまま補充兵として回せ、と言いつ始末です」

「それはまた、横車を押されたものね」

「ええ」

長年のつきあいで、タイミングよくアンナが取り出した冷たい水をレイラは一息に煽った。一晩中、バルト方面軍司令部とやり合っていたので、喉が焼け付くようだった。

「結局どうなったの？」

「スマイラス將軍に頭を下げることにしました。アレクサンダは機密であり、そのパイロットも含めて、WZERO〃部隊の管轄下から外すことはできない、という方向で……問題は、それでも足が確保できていないことです」

戦争に負ける、というのは、つまりあらゆる作戦計画が破綻するということである。道は予定通りに進んでいる補給部隊のトラックと逃げてくる兵士たちのトラックで大混雑し、

行き場を失った弾薬と食糧が駅を埋め尽くし、

鉄道のダイヤは混乱し、空は航空管制官の怒

号で満ちあふれ、何万という兵士たちが羊飼

いを失った羊の群れのように右往左往する。

もちろん勝ったら勝ったで別のアクシデン

トが発生するわけだが、それはそれとして

「にやあ」

足下を黒猫が通り過ぎていった。レイラの

飼猫であるエリザベートだ。城の中の異変

を察したもののなか、あの戦い以来、エリザ

ベートはどうも落ち着かない。

「――エリザ、出撃以来落ち着かないの。パ

イロットたちが出て行ったこと、わかるん

でしょうね」

「そうだと思うわ。猫はああ見えて、犬とは

別に社会性の強い生き物だから。猫はお互い

の居住域を確認し、その無事を把握すること

で、クラウドな群れを維持しているのよ」

「クラウド？」

「犬のように序列が固定された群れを作るの

ではなく、その時々においてお互いの気持ち

のいい距離を確認し合う関係性。完全に帰属

するわけではないけれど、お互いを思い合う、

そういう距離ね。エリザにとって、日向少尉

たちはたぶん、他の猫なのよ」

「猫」

レイラは噴き出すのをこらえられなかった。

あのまじめくさった日向少尉の頭に、猫の

耳が生えているのを想像してしまったからだ。

（子供の頃、そんな日本のアニメを見たこと

がある）

まだ日本が日本だった頃、ユーロピアでは

日本のアニメが人気だった。マンガ、アニメ、

フィギュア、コスプレ、カラオケ。今はもう、

どれも見かけることがない。

「まあ猫に好かれる人に悪い人はいません」

「レイラ、私思うのだけど、猫好きの人は必

ずそれを言うわね」

「そうでしょうか」

「統計は取っていないけど、たぶん」

「そうかもしれません。でもいいんです。猫

ですから」

レイラは笑った。釣られて、アンナもこ

ころと笑う。

笑ったのは何日ぶりだろうか。そんなこと

も考えた。

＊

リガの空は、脳天気なまでに青かった。

「腹が、減ったな」

日向アキトが考えていたことは、この時、

それに尽きた。

かつて名将ナポレオン・ボナパルトは「軍

隊は胃袋で動く」という名言を残した。

軍隊とは何も生産せずただひたすら飯を食

い続けるだけのいわばイナゴの群れであり、

軍事活動とはとりもなおさず食事をどう確保

するか、という作業に過ぎない。近代以前は

ただ敵国を侵略し、その物資を食い尽くすこ

とそのものが作戦行動であり、またもつとも

敵国に深刻な打撃を与える手段であった。

現代戦はそこまでおどろくべきなものではないが、直接戦闘を行なう兵員の数倍に及ぶ後方の事務方が必要となるのは、軍隊に食事をさせるための書類仕事というのがそれだけ面倒なものであるからに他ならない。

そして今、その緻密な補給体制からはじき出された日向アキト少尉は、愛機アレクサンダを積んだ無蓋貨車の床で、半ばアレクサンダの足にもたれかかるようにしながら空を眺めていた。

別に詩的な理由ではない。他にやることになかったためである。

リガの補給敵に着くなりアレクサンダからもぎはなされそうになり、それは責任上出来ない、と主張したところ、「それならそのKMFもどきと一緒にしろ」と暴言を吐かれてそのまま無蓋貨車に押し込まれたのである。

手の中には、どこから回ってきたのか、それなりに高価そうなキャットフードの缶。これでも喰っている、イレヴンにはそれがお似合いだ、という嘲笑とともに投げ渡されたものだ。

喰って喰えないことはない、いやむしろ兵士用のレーションよりマシである可能性もなくはなかったが、翌朝の一斉配給を待つくらいにの忍耐力はあった。武士は食わねど高楊枝と威張るつもりもなかったが、誇りと呼ぶべきものは、まだ少年の心の中にあつた。

ここがアキトのWZERO〃だった。た

ったひとつの貨車、半壊したナイトメアフレームしなくても、彼は戦友たちとの約束を果たすため、どうしても基地に戻らねばならなかった。

幸い、空は刻々と表情を変え、アキトを飽きさせることはなかった。

ふと、黒猫のことを思い出した。ヴァイスボルフ城で与えられた私室――イレヴンに対しては驚くべき処遇だ。あのレイラ・マルカル参謀は何を考えているのかともつぱらの噂だった――の窓から、いつも自分を覗き込んでいた猫だ。確か、そのレイラ・マルカルの飼猫だったはずだ。

＊

「だーからー」

ヴァイスボルフ城の副官であるクラウス・ウォリック中佐は不機嫌であった。

その最大の理由は、進路指導に望む娘から「お父さん、学校にはちゃんとした服で着てね。お酒の臭いをさせないでね」ときつく言われたことであり、その上、進路指導ということはやがて娘が家庭を持って家を出て行く第一歩である、という現実には否応なく気づかされたからであることは言うまでもないが、それは周囲の兵士たちにはまるでわからないことだった。

「何度も言ってるだろ。アノウ中佐が突然指揮所でマルカル中佐を射殺しようとしたんだ。目撃者も山ほどいるし、監視カメラの映像も

提出した。副官である俺と、警備主任の署名付きの書類も出しただろ」

電話口の向こうの何とか言う高級士官は、クラウスの説明に納得していないようだった。長く果てしなく耐えがたい感情的な反論を、娘の写真を眺めることでやりすこす。

「トリーカー。本件については中央司令部の許可を得ている。ヴァイスボルフ城とWZERO〃部隊はレイラ・マルカル司令の下滞りなく任務を遂行中だ。わかったか？ わかったら、つべこべ言わずに日向少尉をドイツまで送れ！」

会話は終わった、というより一方的にクラウスは受話器をたたきつけた。

「リガ方面軍司令部ですか」

型破りな人間ばかりがいるこの城で例外的なまでにドイツ軍人である男、警備主任のオスカー・ハメル少佐がクラウスを見下ろしていた。別に彼を察しているわけではなく、単にクラウスの電話で滞っていた書類のサイン待ちである。

「ああ」

まあ、そんな散文的な関係であっても、否そのような関係であるからこそコミュニケーションは重要だ。軍隊のほとんどの作業は殺し合うことではなく果てしない事務手続きと待機に過ぎない。人間関係の維持こそが主題にならざるを得ないのだ。

「あいつら、どうしてもアノウ中佐がマルカル少佐に指揮権を譲るハメになった、という

どこかで、歌が聞こえたと思った。 死んだ戦友たちの誰かが歌っていた、 日本の歌だ。

事情を納得しやがらねえ。そればかりか、KMFの損耗率が90%を越えた時点で、そもそも部隊そのものが解散されるはずで、その処遇が決まらない限り移送は受け入れられない、と言いつつ出しゃがった」

「軍事的には妥当とも言えますが、縦割り行政の極みですね。地方の悪いところばかりマネしたがる」

「ハメルはあきれ顔で、わずかにずれた眼鏡を直した」

「わかりました。私もリガには何人か知り合っています。彼らを通じて手を回してみますよ」

「頼む。スマイラス將軍にはマルカル少佐が掛け合ってるそう。俺もいくつか飲み仲間裏口を使ってみよう」

「しかし、失礼ですが」

「ん？」

「いえ、自分も含めて興味深い、と思ったんです。こんな風変わりな部隊を維持することに、モチベーションを持っている」

「……何でだろうな」

クラウスはスキットルのウイスキーを傾けた。モルトの芳香が、生の実感を与えてくれる。

「――警備主任の前で服務規程違反とはいい度胸ですね」

「度胸は軍人の美德さ。まあ――そうだなあ、嬢ちゃんのやることをもう少し見てみたら、かな」

「自爆作戦ですよ、自爆作戦！ 何をどう書類に書いたらあんな戦死が正当化できるんですか」

「皮肉な話だけど」

サラ・デインズは少し正気に戻り、まき散らした紙を拾いながら同僚の言葉を引き取った。

「死んでしまえば、書類の上でユーロピア人もイレヴンもないものね。上官命令によって自爆装置を起動させられて戦死した、なんて書類、上が受理するわけないでしょ」

「でも、少佐はそのまま提出しろって」
アンナ・クレマンの「年上の後輩」ことクロエ・ウインケル技術軍曹の声だ。声だ、というの、積み上がった書類、報告書、資料の山に埋もれて、かろうじて頭頂部が見えるか見えないか、という有様だからだ。

「マルカル少佐はそう言うしかないわね。少佐にしてみれば、自分の正当性を主張するために必要でしょうから」

「それに少佐は真面目ですし」

オリビアはそう言って、空になったカップを口に運んだ。相当に疲労が溜まっているらしい。

「正当性が証明できなくても、報告書はちゃんと書くべきだと主張したんじゃない？」
「そうかもね」

正当性。
二十名あまりの若者を爆死させ、しかもその爆死そのものではなく、最後に一機残った

「あらゆる意味で理由になっていません。いませんが」

ハメルはタメ息をついた。

「飲むかい？」

「いえ。――自分はこの部隊で功績を挙げ、軍内部を改革して前線に戻りたい、という欲がある男です。その節は、全うしますよ」

「立派だな、オスカール・ハメル少佐」

「一杯までにとどめておいてください。一杯目以降は、報告書に記載します」

「わかった、わかった」

*

結局、アキトを乗せた貨車がワルシヤワに向かって動き出したのは、それから三日目だった。おかげでアレクサンダのマニユアルを読み込む時間が取れたのは、悪くなかった。

ラトビア南端の町、ダウガピルスまで半日、そこでの乗り換えにまたいろいろあつて一日、そこからリトアニア方面に向かう輸送列車にどうにか便乗させてもらって、ヴィリニウス、カウナスと乗り継いでポーランドと州境の森を越えるまでに実に二日。

湿地と森ばかりだったリトアニアの景色が抜けると、そこは目の覚めるような草原だった。どこまでも果てしなく続く地平線の緑の海の中を、汽車がゆつくりと走っていく。

外の太陽と下からの熱気で両面焼きのハムエッグにされるのは閉口したが、湿度は日本のように高くないから、慣れてしまえば風も

アレクサンダ、単騎の異常なまでの活躍によって薄氷の勝利を収めたナルヴァ撤退作戦いや、それは果たして勝利だったのだろうか。敵兵の十割が倒れ、こちらはただひとり生き残った。

それはことごとくが死んだ、というべきで、戦いと呼べるようなものではなかったのではな

ないか。
だが、前線における戦いが終わったとしても、後方の戦いは終わってはいない。正確に何が起きたのかを把握し、彼我KMFの戦闘記録をまとめ、死んで行ったパイロットたちの遺族たちの処遇についての上申をまとめ、あらゆる方面に予算を請求するための戦い。

その戦いの中では、すべての死も破壊も書類の上の数字に過ぎない。だがその数字こそが人々を生かす物であることも確かだから、彼女たちはまた、自分たちの戦場へと躍り込んでいくのだ。

*

太陽は中天でどどまり、時折過ぎていく綿雲だけが、わずかな涼を与えてくれる。

名前も知らぬどこかの駅で、アキトの乗った車輜は機関車の交換作業を行っていた。牽いている貨車と客車はドイツ方面軍のもので、機関車はバルト方面軍のものなので、ここで別の機関車につき替える必要があるのだ。

駅舎から飲料水を頂戴すると、貨車のそば

あつて快適なものだった。

どこかで、歌が聞こえたと思った。

死んだ戦友たちの誰かが歌っていた、日本の歌だ。

だが、思い出そうとするとどうしても、それはメロディーの形を取ろうとはしなかった。

*

アノウ中佐という人物は在任中も部下たちに愛されていたと言いがたかったが、いなくなつてからはさらに愛されなくなった。
「ああもう！ どれだけ書類書かせれば気が済むのよ！ だいたいこれってオペレーターの仕事じゃないでしょ！」

紙の束を盛大にまき散らして、サラ・デインズ曹長は同じ部屋で延々と書類を書き続ける同僚たちの心中を大いに代弁してみせた。
「そう言わないで。気持ちはわかるけど、私たち技術部も手伝ってるでしょ」

アンナ・クレマンの助手である眼鏡の理知的な女性技術下士官、ヒルダ・フェイガンがたしなめた。

確かに、オペレーターが事務方を手伝うのもおかしい話だが、技術方が出張ってくるのはそれどころではない。

「それもこれも、アノウ中佐があんな作戦立てちゃうからですよ」

眠気覚ましを濃く入れたコーヒーを煽りながら、そばかすの消えないオリビア・ロウエル曹長が何度目かのタメ息をついた。

に大きな木があつてちようどいい日陰になつたことを幸いに軽く寝入っていたアキトだが、ふと耳障りな罵声が聞こえてきて目を覚ました。

罵声が不愉快だった、というのではない。何かトラブルが起きているならそれに即応しなければ、戦場では死ぬだけであるという認識があるからだ。

そして日向アキトには、戦線の後方にいればそこが平和である、という愚かな認識はない。戦争と平和はコーヒーカップの中のミルクとコーヒーのようなもので、常に入り交じりその境界線は定かではない。

「どうした、もつと馬力を出せよ！」

「根性見せてみる！」

「あの格好、まるで豚みたいだ」

「歩いて田舎へ帰なよオ！」

罵声は、前線から戻る兵士たちを乗せた客車の窓からだった。

見れば、列車のすぐ脇のぬかるんだ泥道の側溝に、荷物を満載したオンボロのバンがはまり込んでいる。

旅芸人か、それとも難民か。あるいは両方であるのかもしれない。中央アジアからルコ、さもなければユーゴスラビアあたりから流れてきたのだろう、と見当をつけたが、アキトにもどこの国の住人なのかは正確にわからない。
(ユーロ・ブリタニアの侵攻から逃げてきた連中か)

「——こちら“wZERO”アレクサンダ。
先頭機関車、聞こえるか。
これより起動する」

その推測が正しいかどうかはわからなかったが、バンの住人たちが必死にその後部を押しつけて脱出しようとし、かつその試みが功を奏していないことは明白だった。

どうやらその光景が、兵士たちには同情すべきものではなく、格好の滑稽な見世物に見えるらしい。とうてい文字にすることがはばかられる、民族と性別と職業に関するあらゆる差別的な言辭が飛び交っていた。

少し考え、アキトは無蓋貨車に座り込んでいる白い巨人を見上げた。
「……こちら“wZERO”アレクサンダ。先頭機関車、聞こえるか。これより起動する」

「!? 貴様、何を……!」
通信機の向こうから帰って来た運転士の声は、眠りから呼び覚まされた人間の持つ、狼狽の気配がした。

「本機は特秘任務中につき、理由を説明する要はない。起動そのものを、記録に残す必要もない。すぐ終わる、目をつぶっている」

「おい、イレヴン! 積み荷の分際で!」
「アレクサンダ、起動。無線封鎖に入る」
耳障りな通信をこれ以上聞くつもりもなかった。

どうせ、この列車の兵士たちを皆殺しにするのに、アキトがその気になれば30秒もかからない。彼らは見ているだけだ。報告書に書く、と言われればこれ幸いと報告しないに

違いない。自分たちの今日のワインと肉、基地の外でのお楽しみ、それに無事動め上げたあとの年金、そういうものには興味がない奴らなのだ。

ヴァイスボルフ城からのデータバックアップがないために、機能のほとんどは制限されているが、立ち上げるだけなら問題はない。野戦中に上級司令部と連絡が途絶えた場合に、パイロット権限で起動するシステムは設けてある。アノウ司令が外していたものを、あの金髪の参謀が再起動させてくれたものだ。そうでなければ、そもそもここまで運ぶこともできなかったらう。

まともな整備こそ受けられなかったものの、アンナ・クレマン特製の新型リニア・アクチュエータはよく動き、眠っていた鋼鉄の巨人がゆっくりと立ちあがる。

頭部の複合センサー、フアクトスフィアを起動。ぬかるみに閉じ込められたバンに、流体サクラダイトを含む爆発物の反応がないことをスキャンする。

ぬかるみに沈み込まぬよう、足後部の大型車輪「ランドスピナー」を展開。接地面積を広げて、バンに歩み寄る。元々欧州の泥濘や湿地での戦闘を想定した足回りに不安はない。「アレクサンダ」の手振りで、バンの後ろの人々にどくように伝える。身長4メートルを越える巨人が迫ってくれば、その意図は明白だった。すぐに、バンの人々が道側に飛び退く。

「でも、ありがとう」
理解しているのかいないのか。幼い少女の笑顔は、空に輝く太陽のように天真爛漫だった。少し頭を掻く。

このままでは安眠などむさぼれないのは事実だった。いや、そもそもいつ列車が発車してしまうかもわからない。
アキトは立ち上がり、アレクサンダの cockpit に向かった。緊急時用のプログラムをいくつか起動して、ややあつて排出された一枚のプリントアウトを取り出す。
「持つて行きなさい。この先、いくつかの道が軍によって封鎖されている。赤く塗った道を通れば、日暮れまでには街につけるはずですよ」
手渡された地図を見て、少女は一瞬意図を閃かした顔を、そしてあつと顔を明るくすると、貨車から走り降りて、もう一度アキトに手を振った。
列車が動き始めても、まだその後ろで、少女は手を振っていた。小さく、その後ろで少女の親たちが、アキトとその背後の、神の像にも見える鋼鉄の巨人に祈りを捧げているのが見えた。

腰を落とし、KMFの両手をバンの後部にかける。
口で言うのは簡単だが、一歩間違えば転倒しかねない難しい動作だ。二足歩行というのは、ただバランスを変えるだけでなく危険な、ひどく不安定なものなのだ。
もし倒れば、“wZERO”の看板を背負ったまま、罵声を浴びせる兵士たちの前で、ブザマに尻餅をつくことになる。悪くすれば、痛んだ機体が、自重によって崩壊することにもなりかねない。
だがアキトはそれを、眉ひとつ動かさずにやっていた。もちろん、変形を想定して柔軟かつ強靱に構築されたフレームと、人間に限りなく近い動きを可能にするアクチュエータの力でもあったが、それを行なったのは、操縦士の技術だ。
開発主任のアンナがここにいたら、アキトのスティック操作が、コンマ数ミリ単位の精妙さであり、センサーすら読み取れぬ細かい路面情報を逐一確認しながら注意深く体重を移動させて、泥はねすらなしにアレクサンダの姿勢を変更させたことを指摘しただろう。
促成栽培のパイロットではありえない、それは達人の動きだった。
「よし」
精密作業にも対応しているアレクサンダのツメ先で、バンを少し引き上げるようにしながら、ひよい、とアキトは路肩に戻した。ようやくそこで意図を察したバンの人々々々

ほぼ一週間。
古い輸送トラックを運転して、針葉樹林の真中にそびえる山城が見えてきたのは、七日目の朝のことだった。城の後背の稜線から、血の色をした朝日がゆつくりと昇ってくる。
「朝日、か」
かつて日本という国の象徴だったその輝きは、もとより誰のものでもない。
だから、アキトと物言わぬアレクサンダ、そして彼とともにある戦友たちの霊を、太陽だけは迎えてくれていたのだ。

「にやあ」
てしてし、とエリザベートがベッドで眠っている——今度はアンナがベッドに運んでくれた——レイラの頬をつついた。
「うーん……ウォリック中佐……第二次拡充計画の予算についてはもう一度上層部と掛け合ってください……アレクサンダ」の補充なくしてこの戦いは……」
「にやあ……」
「いえ……私もスマイラス將軍に掛け合います。補充のパイロットは都合つけますから、アンナにはタイプ02の開発はそのまま進めてくれるように」と

「にやあ」
レイラの体は、泥を詰め込んだように重かった。疲労が全身に染みこむ、そのような感触だ。

日向アキトという士官は、たとえ相手が少女でも、敬語を使うことをやめようとはしなかった。

「連中のヤジが聞くに堪えなかったからしたまでです」
林檎を儀礼上も、また栄養補給の必要からもありがたく受け取り、アキトは唇の端で薄く笑った。天使というよりは、悪魔に似た笑顔だった。

「ああ」
先ほど路肩から引き戻した、難民らしい人々、そのひとりであろう幼い少女が、林檎を差し出してた。どうやら、事故った時にバンから飛び散った荷物を片付けたり、これからの道を相談したりで、まだ駅にとどまっていたらしい。

「ありがとう」
「ああ」
林檎を儀礼上も、また栄養補給の必要からもありがたく受け取り、アキトは唇の端で薄く笑った。天使というよりは、悪魔に似た笑顔だった。

「連中のヤジが聞くに堪えなかったからしたまでです」
日向アキトという士官は、たとえ相手が少女でも、敬語を使うことをやめようとはしなかった。

それからワルシヤワで別便に乗り継ぐの一日、ワルシヤワからヴァイスボルフまで一日。リガとワルシヤワの移動時間を含めて、

「日向アキト少尉、現時刻をもちまして、 原隊に復帰いたします」

窓を指差すようにして、エリザベートが鳴いている。

トラックの止まる音。

「あ……！」

朝霧の中に、抜き身の剣のように立つ少年。ナルヴァ救出作戦の、たったひとりの生存者。

不覚にもレイラは、彼が生きていたことを知って泣きそうになって、涙をぬぐって、次に彼がヴァイスボルフに向かっていることを伝えなかった正規軍に怒りを燃やし、そしてそのまま駆け出そうとして、自分が下着姿であることに気がつき、大慌てでクローゼットへ走った。

*

金色の髪を朝日に透かして走ってくる少女は軍人というよりは、場所柄も相まって姫君という雰囲気だったが、アキトはおくびにも出さず、目の覚めるような敬礼をすだけだった。

「日向アキト少尉、現時刻をもちまして、原隊に復帰いたします」

「レイラ・マルカル少佐、日向少尉の原隊復帰を現時刻をもって承認します。お疲れさま、少尉。何か必要なものはありますか」

「特には——あ、いえ」

アキトは少しだけ、いたずらっぽい顔をした。

「何か？」

「キャットフードを」

胸ポケットから古びた缶詰を取り出し、アキトはレイラに差し出した。戦利品を差し出す、不器用な猫のようだった。

「あなたの同居人にあげてください」

「え——!？」

レイラは当惑を露わにした。猫を飼っていることを知っているのは、アンナとあと数名だけだと思っていたからだ。

「少佐も案外、かわいらしいところがあるんですね」

「……猫好きがみんないい人というわけではないようです。油断のならない人物です、あなたは」

そして少年と少女は、朝日の中をゆつくりと歩き出す。

彼らもまだ知らぬ、運命に向かって。

〈了〉